

第17期うきたむ学講座（2025年度）

第1回講座

講座①

『絵図と水帳からみる河川の氾濫』

長井市観光文化交流課 岩崎 義信 氏

令和8年2月1日（日）

会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

絵図と水帳からみる河川の氾濫

— 近世米沢領の資料を中心に —

長井市観光文化交流課 岩崎義信

1 米沢領内における河川の氾濫

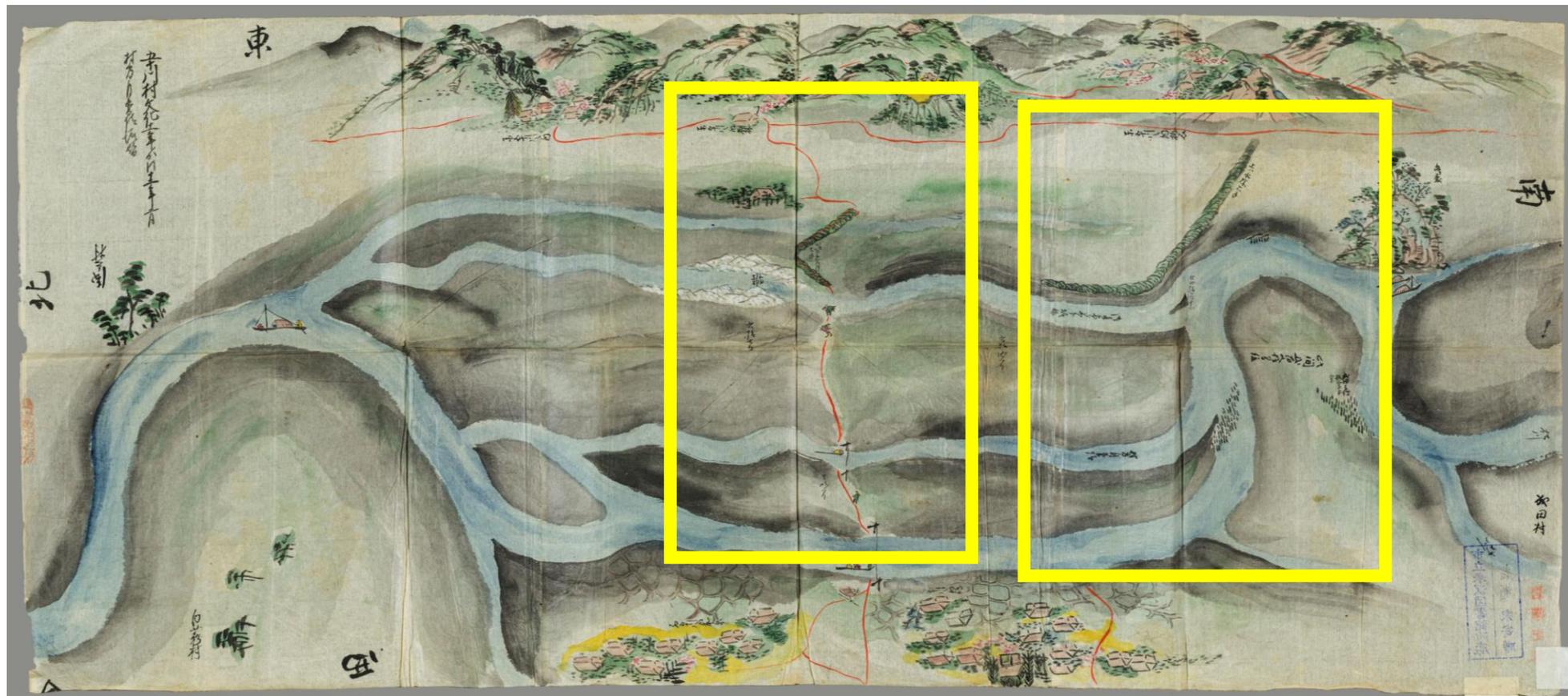
- 河川の氾濫は、藩による災害の記録や復旧工事の様子を描いた絵図をはじめ、肝煎等の覚書や随筆等の古記録から当時の様子をうかがい知ることができる。また、各村の水帳（検地帳）を詳細に分析することで罹災地域の特定が可能になる。
- 米沢領内では、宝暦・天保・安政年間に大規模な河川の氾濫が多発している（付表1参照）。
- 氾濫時期を西暦に置き換えてみると、7月の梅雨末期と秋の台風到来時期に多く見受けられるほか、雪解け時期の氾濫もある。
- 藩による被害状況は、死亡者、田畑・家屋被害、橋、堤・川除（土手）等に分類・記録されている。

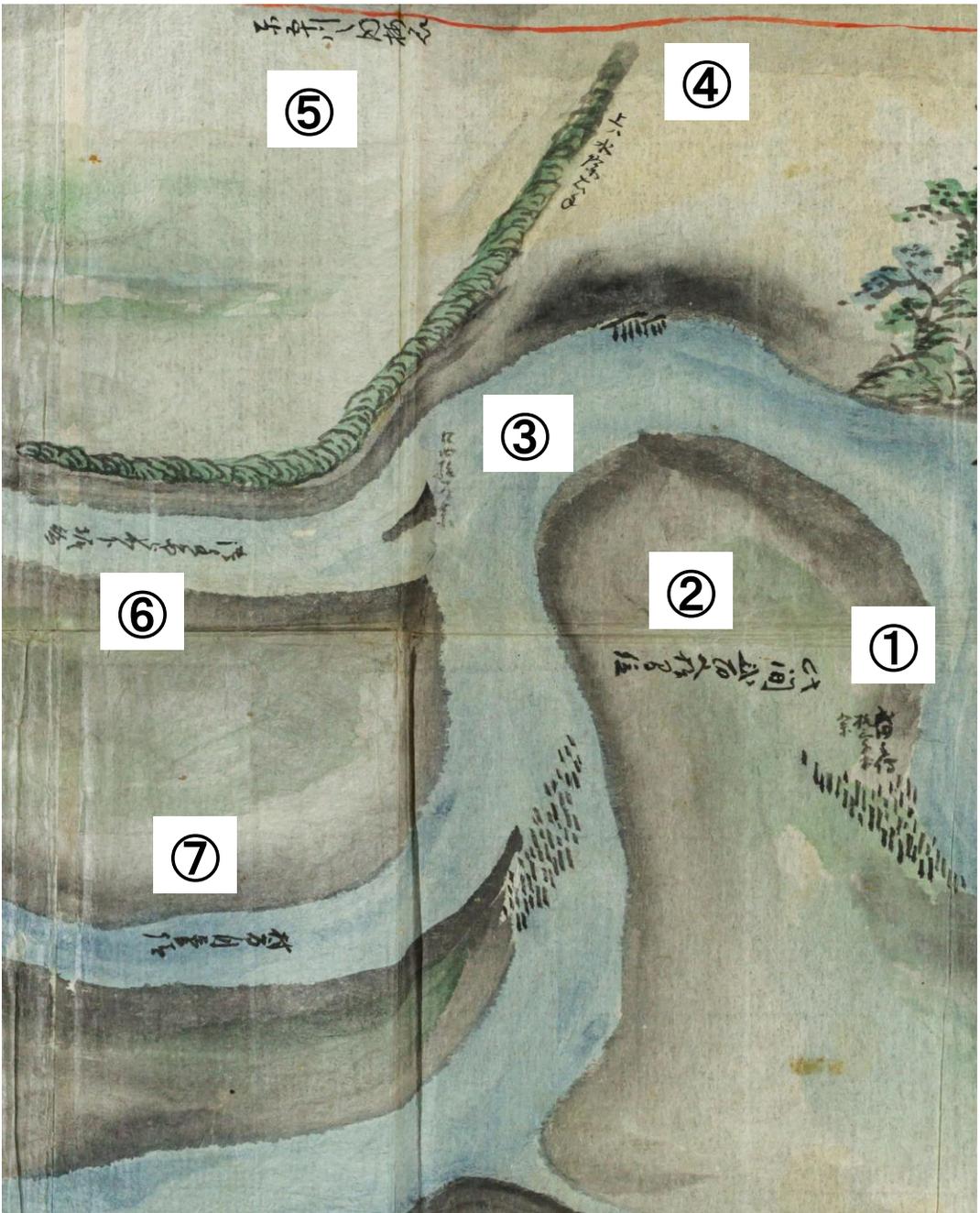
2 絵図に描かれた氾濫と対策

① 「五十川村附近川筋図」

岩瀬家文書：市立米沢図書館蔵

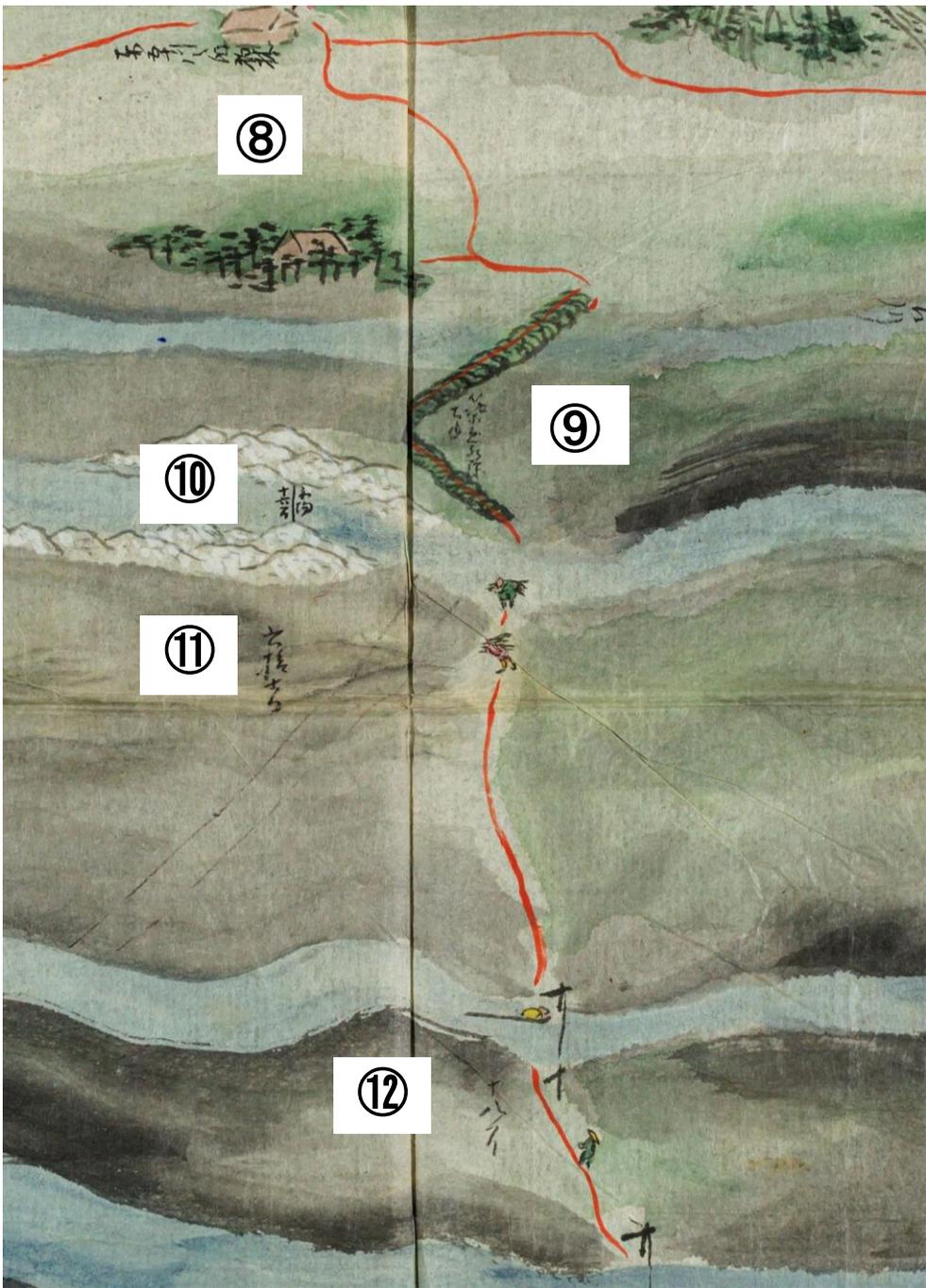
- ・ 五十川村附近の普請工事の様子
- ・ 文化11年から文化12年2月にかけて
- ・ (西暦1814年〜1815年3月)の工事
- ・ 村負担で三筋に堀替された状況を描出





- ① 成田手伝
杭三千本余
- ② 此間貳百五十間位
- ③ 同四拾間余
- ④ 上ハ水除土手
- ⑤ 東五十川之内梅かい (開)
- ⑥ 御手当被成下堀替
- ⑦ 村方自普請

- ・ 打ち杭によって流路を制御する工法
(野川との合流地点)
- ・ 村負担による普請
- ・ 水除土手による氾濫防止対策

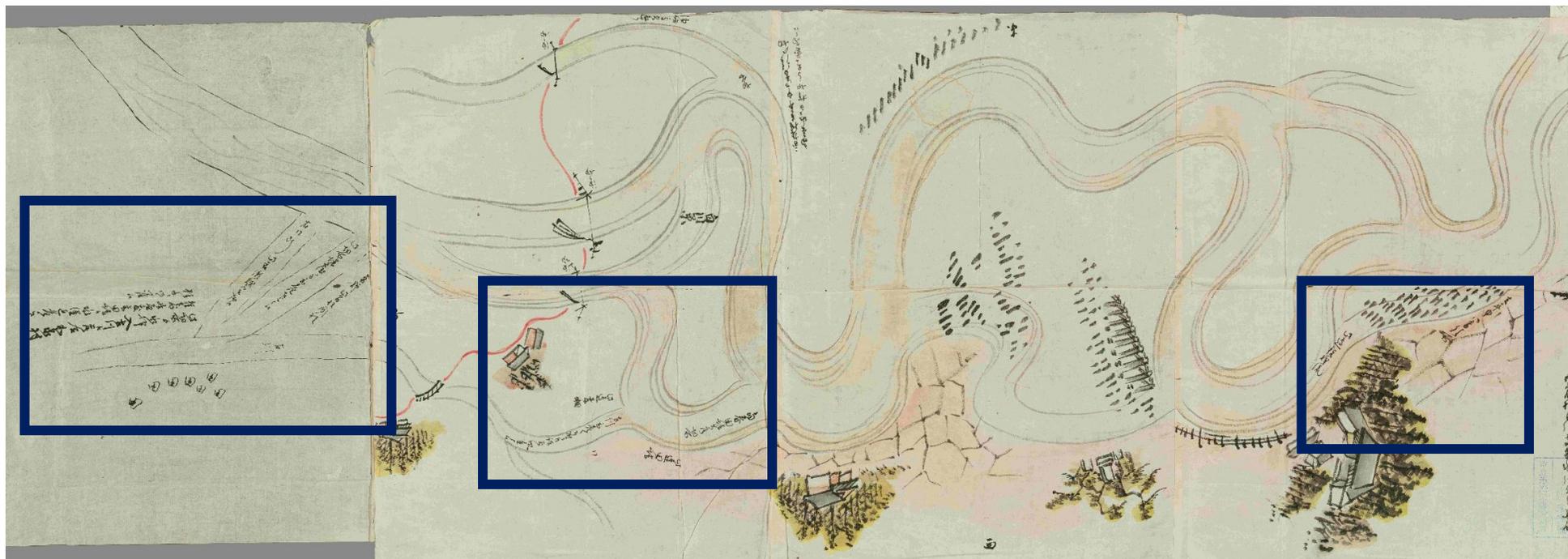


- ⑧ 東五十川之内柏林
- ⑨ 築立水除土手
- ⑩ 舟場十六間
- ⑪ 六拾四間
- ⑫ 十八間

- ・ 東側の川筋が工事進行形か
- ・ 築による普請現場用の水除土手か
- ・ 徒歩による川筋の横断
- ・ 付近に舟場（渡船場）の存在
- ・ 村役か役人によって描かれたものか

② 「時庭村白川当春水川欠之図面」

岩瀬家文書：市立米沢図書館蔵



- ・ 時庭村での雪解けによる白川の氾濫状況の絵図（作者・作成年不詳）
- ・ 打ち杭工法による流れの制御
- ・ 高い確率での氾濫発生
- ・ 村による繰り返し行われる普請



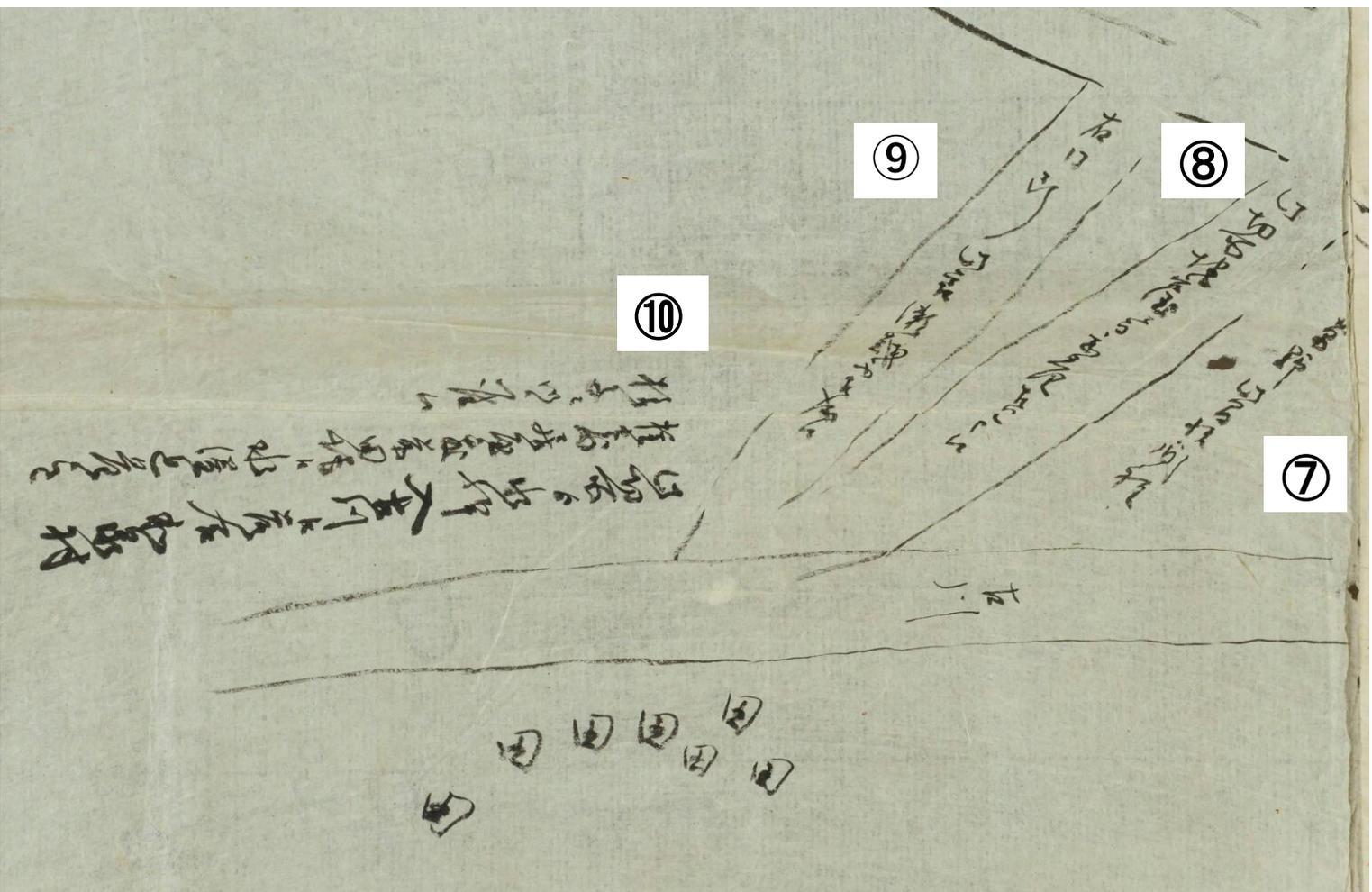
- ① 去年中御普請所
- ② 此辺杭押流

- ・ 氾濫が起きやすい地域
- ・ 打ち杭により流れを制御する工法



- ③ 当春田地欠落切所
- ④ 古川甚危く相成二付仮留致
置申候
- ⑤ 此辺桑畑
- ⑥ 此辺田地

- ・ 氾濫が河川の湾曲部に集中している
- ・ 古川（旧川筋）にも溢水が流れ込み
水除対策がなされている
- ・ 田畑にも氾濫が迫っている



- ⑦ 草野此間拾間程
- ⑧ 此切所地窪二付而甚危相見申候
- ⑨ 右同断、此節瀬越不相成候
- ⑩ 此切所方水押入、古川江落合、和泉村
権右衛門居屋敷前田地江水溢迄危き
様子二御座候

- ・ 決壊個所の状況を詳細に記述
- ・ 決壊個所に加え、下流域（泉村）の被害状況についても記述

③ 松川堀替工事図（部分）

作者：米沢藩校興讓館範士 窪田茂遂
（個人所蔵）



- ・高玉村付近の河川決壊で、大きく蛇行した川筋の堀替工事の様子を描いた図
- ・作事方の役人と、近隣住民が作業に従事
- ・医師芳賀忠徳・忠庵父子（緑色の着物的人物）によるツツガムシ患者の治療風景
- ・堀替工事の流路の締切に「牛杵」（聖牛）を設置

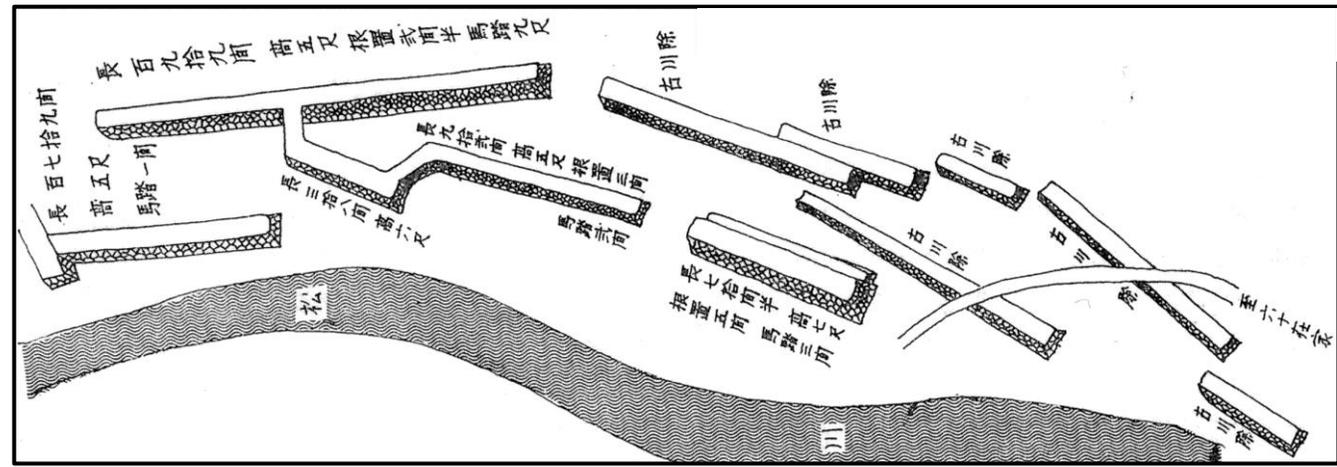
頭首工完成前の最上川の締切状況：長井大橋付近の「穴堰」に対応

④ 「谷地河原堤防御手伝川除絵図」 (直江石堤防)

- 谷地河原堤防は、直江兼続が慶長年間に城下町拡張に伴う治水対策として築いたもので、松川左岸域を河川氾濫から守る役割を担った。
- 大雨による河川の氾濫で堤防は度々決壊し、寛永8年(1631)・寛永17年(1640)・寛政10年(1798)・文化9年(1812)・文政8年(1825)・文政12年(1829)に普請が行われている。
- 当該絵図は文化9年の普請の様子を記録したものの。



「谷地河原堤防御手伝川除絵図」 (市立米沢図書館蔵)
「河川技術からみた米沢藩士による直江石堤(谷地河原堤防)
の普請とその意義」『日本大学工学部紀要第65巻1号』
知野泰明・後藤光亀 2023年より転載

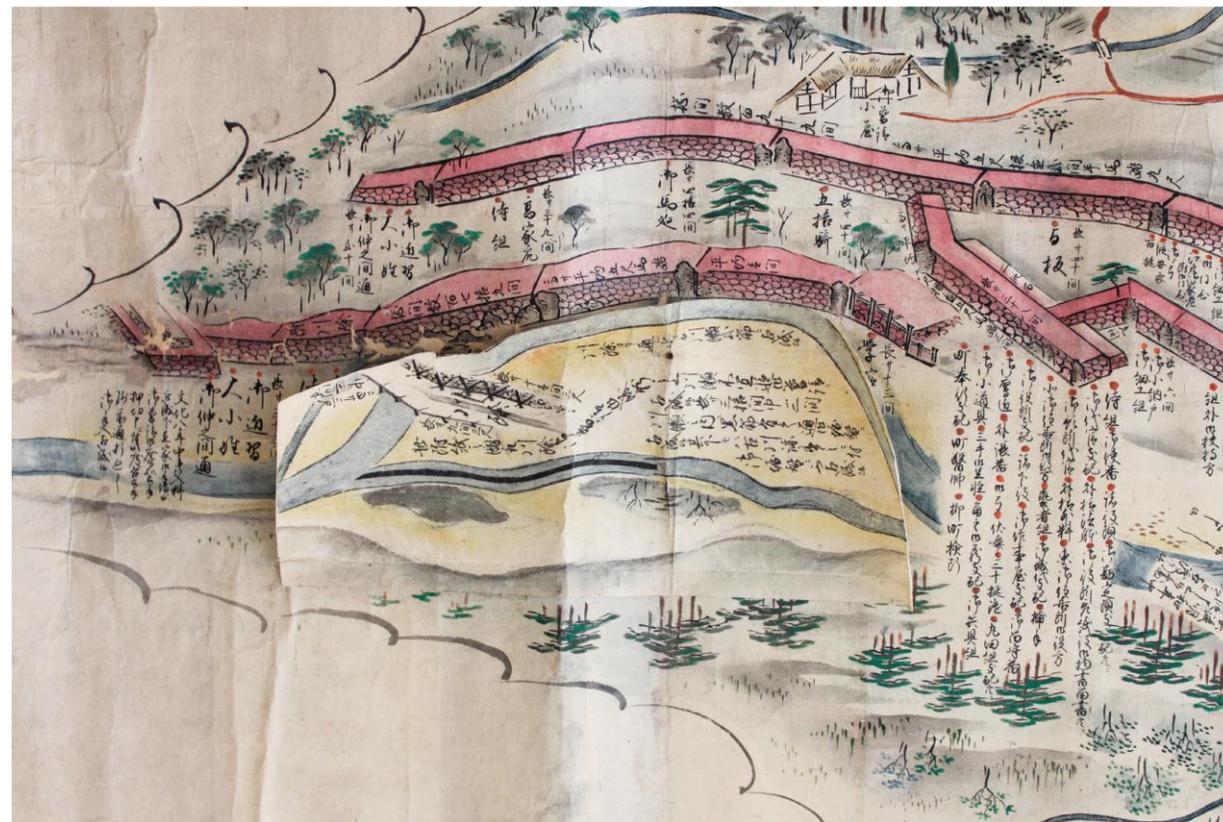


「谷地河原土手の概略図」
「米沢の城下町と武家屋敷」『米沢風土記第3集』
下平才次 1976年より転載

直江兼続による堤防造成の経緯や、上杉鷹山による視察の状況、改修年、石堤の長さ・敷幅・天端幅・高さ、普請を担当した家臣団名（与板組・三手組・馬廻組等）が記されている。

「古川除」の記述もあり、従来からの堤防も描かれている。

絵図方の岩瀬三左衛門作成と伝わる。



絵図には貼紙があり（図右）、

川瀬不宜、追御普請ニ相成候。長サ三拾間、巾三間川瀬之内ニ黒筋有之通、御堀替ニ相成候。其下モハ古川跡有之ニ付御堀替ニ不相成候

とある。

普請完了したが（図上）、流れ不良のため黒線部分が追加普請で堀替が行われた（図右）。

⑤ 川絵図に見える水制工法

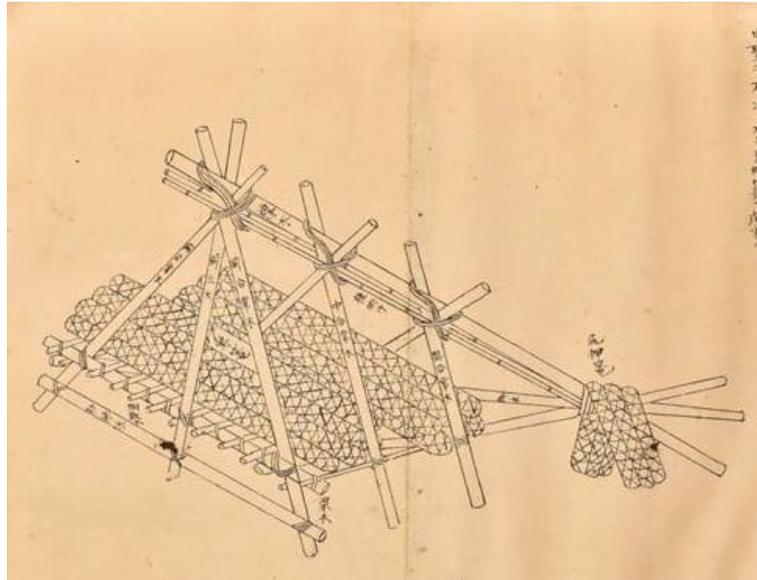
打杭

木材や竹の杭を河床に打ち込み流れを制御し、河川の保護に利用した。



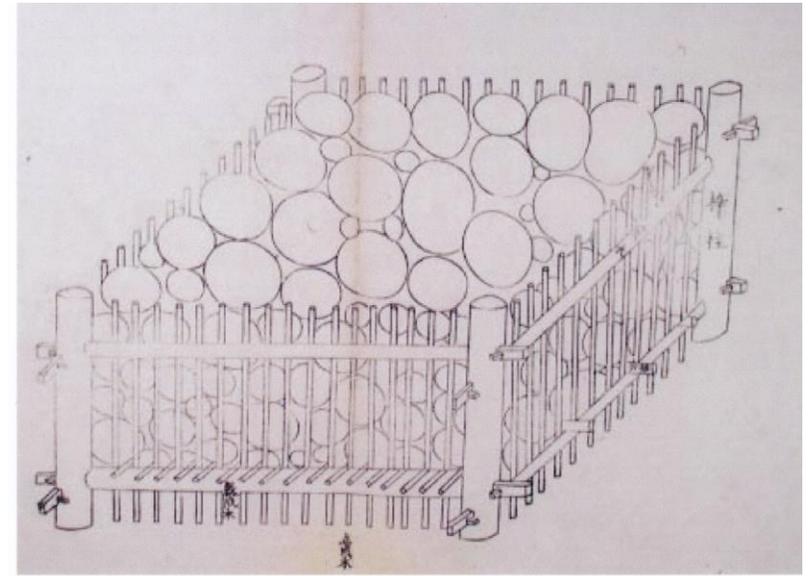
牛類

三角錐状に組み上げた木材を河岸部に設置し、河川の流れを制御。竹蛇籠とよばれる筒状に編んだ竹籠に礫を詰め重石とした。



柵類

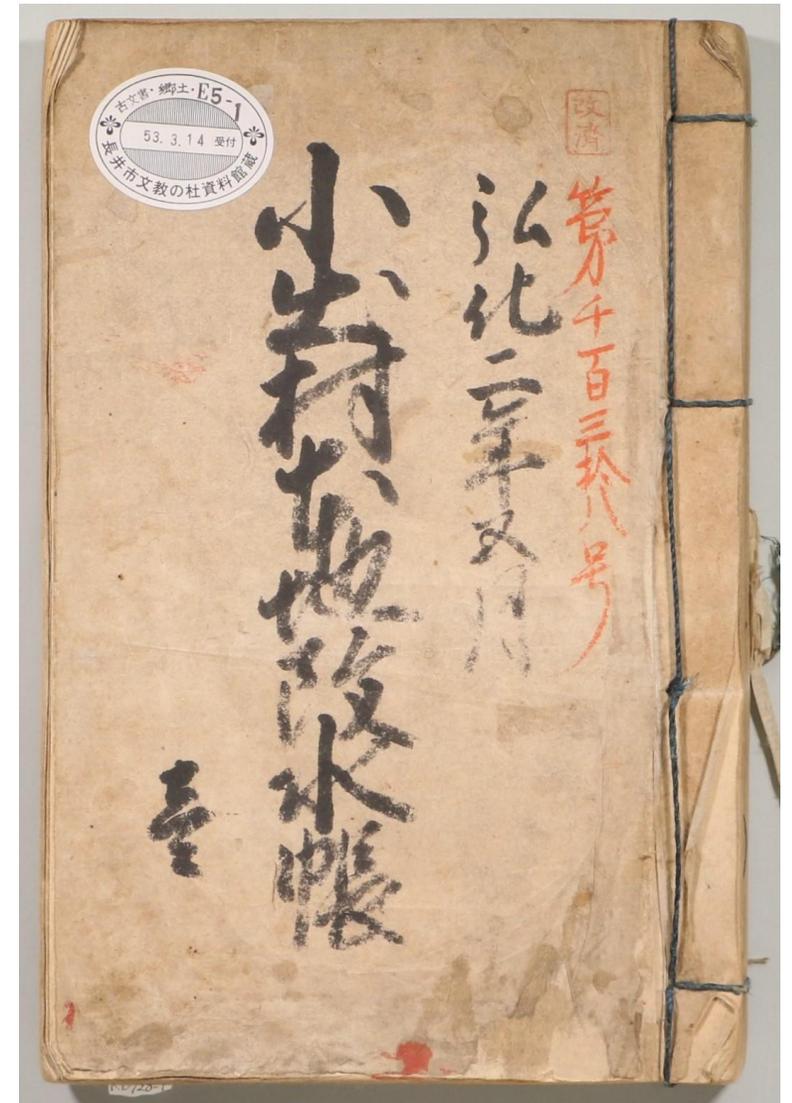
四角形に組み上げた木柵を施行場所に設置し、石を詰め込み水中に沈める工法。「牛柵」と併用し制御効果を高めた。



3 水帳にみる氾濫関連資料

① 小出村の水帳

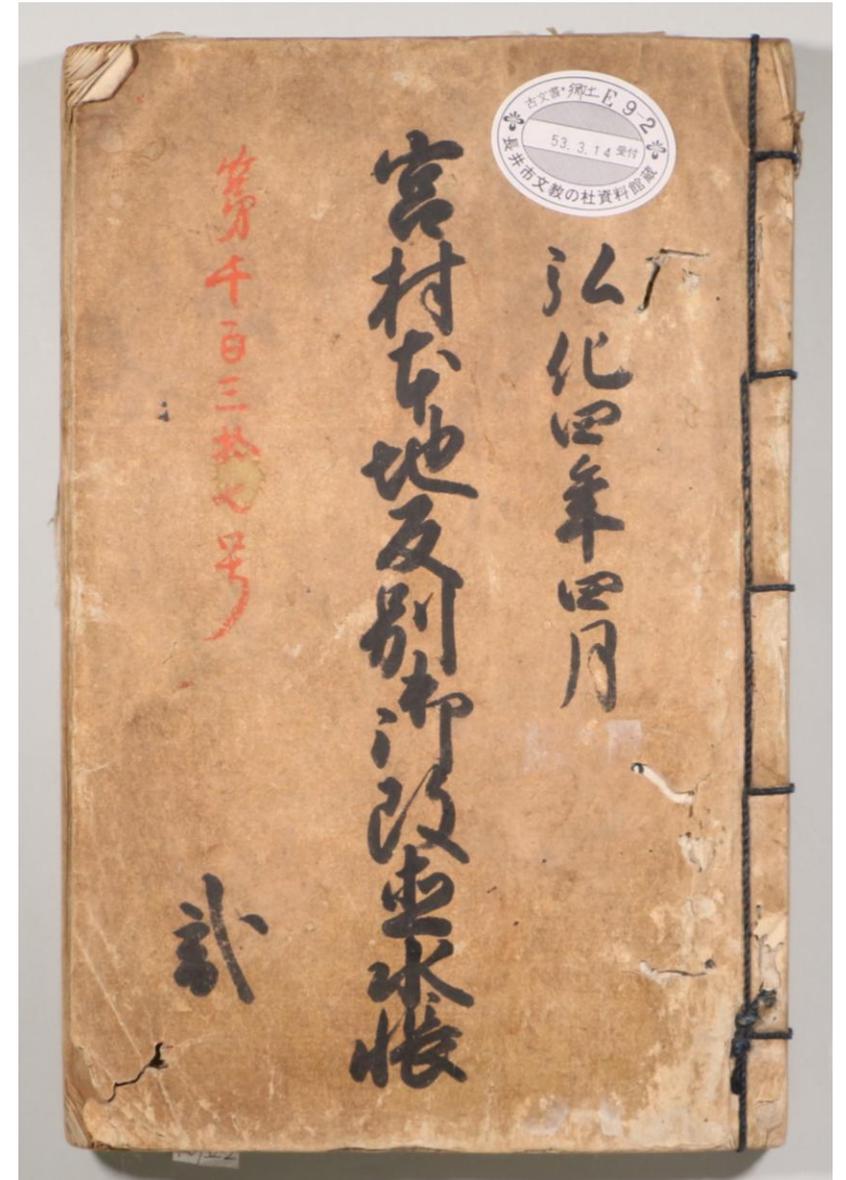
- 「水帳」は、検地の結果を記述した土地台帳で、地域や農民支配の基本台帳である。
- 「弘化二年小出村本地改水帳」 壹・貳・参があり、弘化2年（1845）に書き改められたもの。
- 水帳に「〇〇引」「〇〇永引」という記述があり、土地の貢租（税）について減免や免除するという意味。
- 「川欠」は、河川の氾濫により田畑が押し流され、復旧の見込みが立たない農地に、貢租免除となる措置を執った（弘化4年以前の記載はない）。
- 同じく「土手代永引」は、農耕地を土手（堤防）用地に転用するので、所有者の貢租免除を土地台帳に記したものの。



「弘化二年小出村本地改水帳」 壹
：長井市蔵

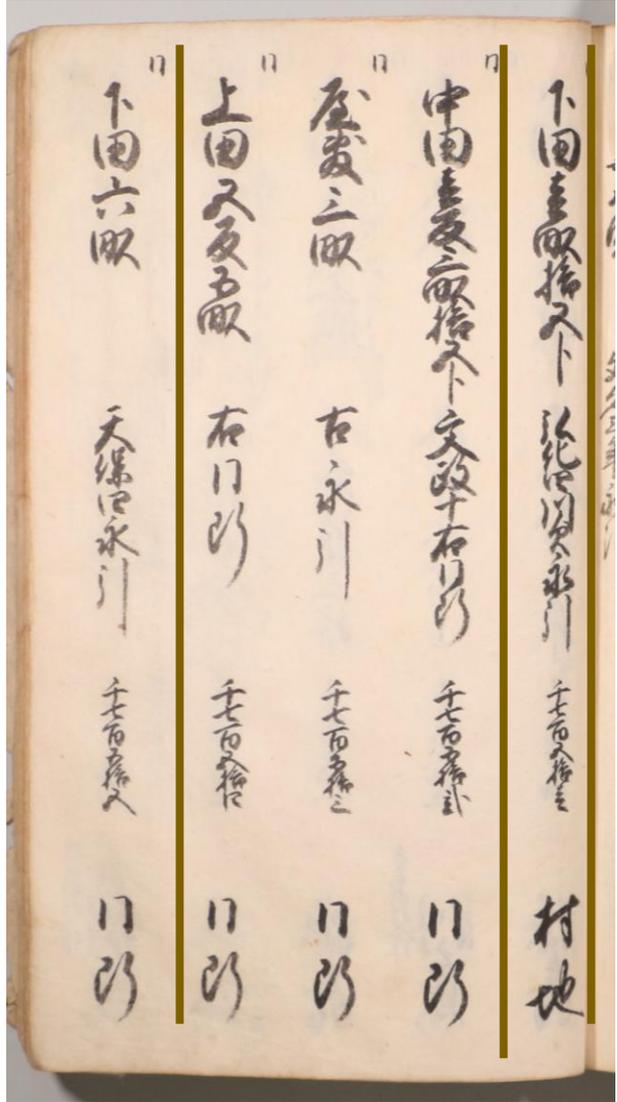
② 宮村の水帳

- 「弘化四年宮村本地反別御改直水帳」があり、弘化四年（1847）に書き改められたもの。
- 寛政8年（1796）以降、慶応元年（1865）までの、宮村の土地の歴史が反映されている。
- 永引の種類は、川欠や堰代に関するもの、青苧蔵に関わる屋敷引がある。
- 宮村の特色として、川欠の記述が多い。70年間に16回の川欠が確認される（平均すれば4年に1回の割合で発生）。
- 永引の地名から、洪水は野川流域で多く発生していることが確認できる。
- 補足：水帳巻末の石高の脇に「内百九拾九石七斗九升五合 田辺江送ル…」との付箋がある。「田辺百姓」の入作により、開発が進められたことを裏付ける史料である。



「宮村本地反別御改直水帳」貳：長井市蔵

川欠永引と古永引 (付表3)



同
下田六畝

天保四永引

千七百六拾五 同断

同

向川原

下田壹畝 壹拾五步

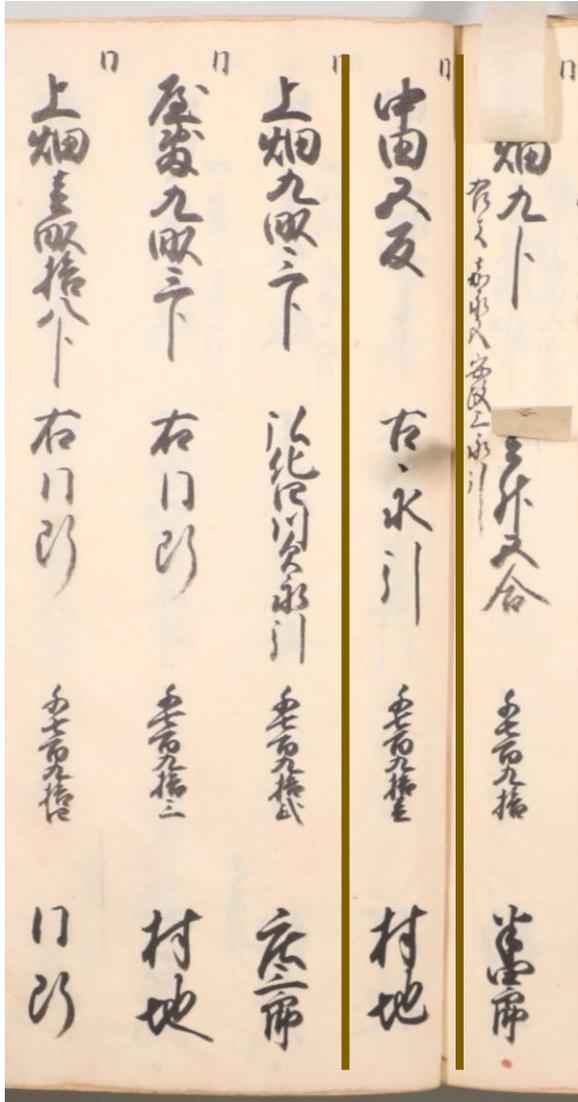
弘化四川欠永引

千七百五拾壹 村地

中田壹畝 三畝 拾五步

文政十右同断

千七百六拾貳 同断



同(寺泉境)

中田五畝

古永引

千七百九拾壹 村地

同

上畑九三步

弘化四川欠永引

千七百九十貳 庄三郎

4 古記録にみる河川氾濫関連の記録

① 『上杉家御年譜 四 定勝公』 寛永8年5月23日より

「松川川除普請ヲ 七手ノ士兩御馬廻 并志駄組ニ命セラル
仍テ御使発知半衛門政頼ヲ以テ 赤飯 珍醪等ヲ諸士に賜ル
各登城御礼ヲ述フ」

○ 上杉定勝が家臣に手伝普請の命を下した記録で、「御手伝」の初出といわれている。
* 『上杉家御年譜』は上杉家歴代藩主の年譜で、謙信から茂憲までを415巻に収めたもの。

② 「三重年表」 寛政9年より

「九月朔日六日大雨洪水ニテ流失稻（中略）拾上タル者八人名
第一ノ御國用ヲ危ニ臨テ拾得タル者トモニ付拾得タル分其者
ノ所務タルヘキ由仰出サル委細ハ印一通ニアリ」

○ 洪水で流された稲束は拾得した者の所有物と認める記録。
* 『三重年表』は荻戸善政（没後は嫡子か用人）が著わしたもの。上段に上杉家・中段に江湖（世間）・下段に荻戸家の出来事が三段にわたり記述されている。

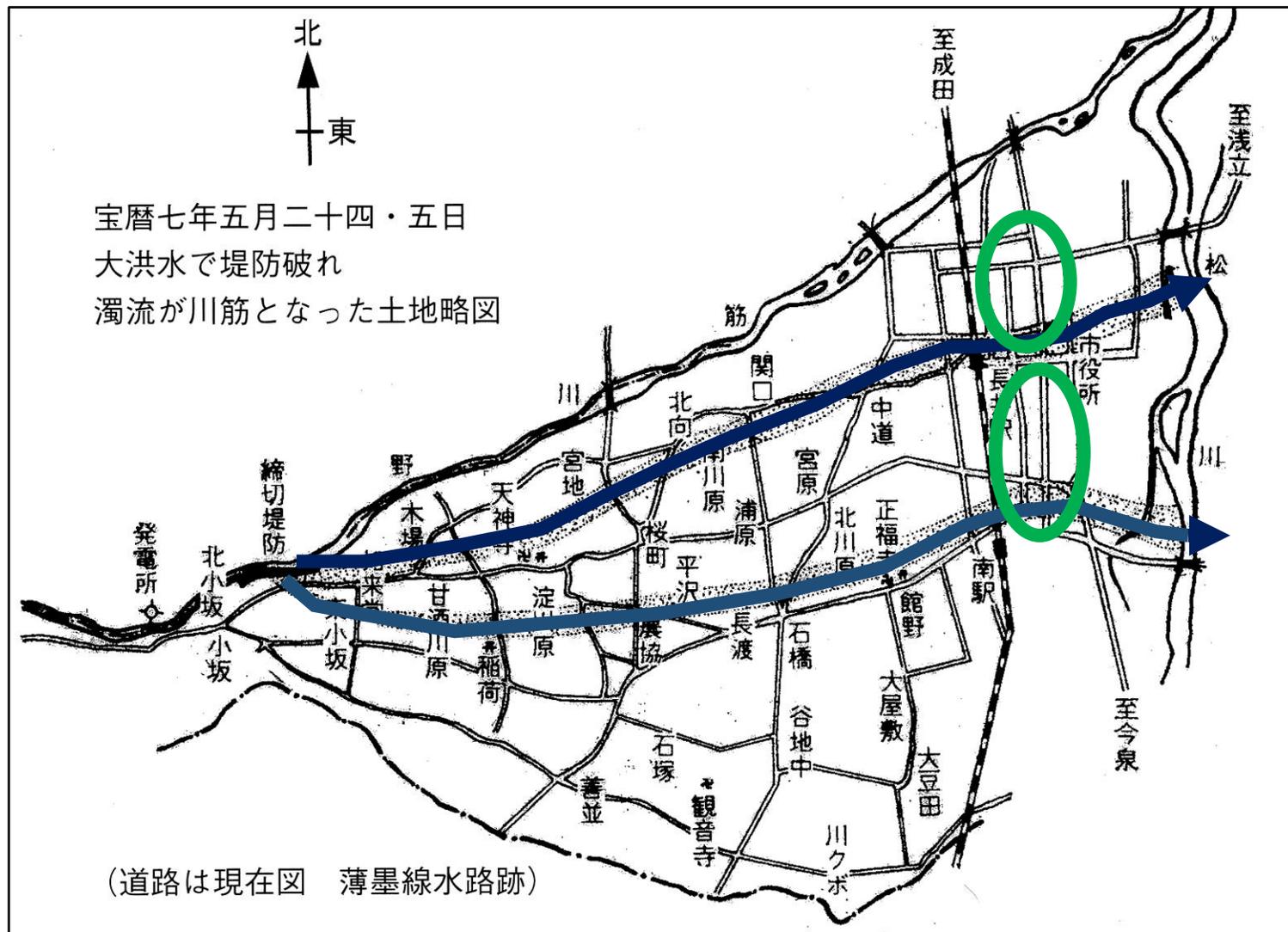
③ 『牛涎』 10巻の河川氾濫個所（抜粋）

「廿五日の朝平山の方を見るに、田畑の上ましろに一段高くみへたれハ、油断すへからず、はやく朝飯を喰仕舞とて、食おはらぬに早一度にドツと押来る、戸・壁わらわらト破れ、川原町の家の内帯にとゝく、平山より臼・杵・戸・障子・絹・匱・家具・樹木一面に落れ来る、宮村片倉殿城址卯の花の城と云に土手登り見るに、デノミネ迄一面海の如く白波を揚たり、摂取院の北の方、昔城溝の田と成りたる所、臼小屋なと流れたり」（以下省略）

○ 長沼牛翁が宝暦7年5月25日（7.11）の大雨による野川の氾濫で罹災状況を記したものの。

* 長沼牛翁：宝暦11年（1762）宮村の富商長沼家の長男として生まれるが、学問と医術を志し家業を弟に譲り、諸国を遊歴する。『牛涎』は牛翁が文化6年（1805）から執筆した随筆集で、60巻（一部欠損）で構成されている。

④ 宝暦七年野川の氾濫と濁流の流れ（復元図）



- ・「宝七の洪水」は米沢領内22カ村で大きな被害。
- ・米沢藩から幕府に国役普請の願いが出される。
- ・明和7年（1770）に国役普請の締切堤防竣工。
- ・明和8年（1771）米沢藩による工事竣工。
 - 幅12間（21.6m）
 - 高さ1丈5尺（4.5m）
 - 延長250間（450m）
- ・現地指揮を執った加納久右衛門の指導ぶりから、平山村では、天神寺境内北側に「水天宮」を祭った。

濁流の推定流路『平野村郷土誌』1968年より

⑤ 平山締切堤防の変遷

- ・ 宝暦 7年 (1757) に決壊
明和 8年 (1771) 竣工
- ・ 明治38年 (1905) に決壊
明治39年 (1906) 竣工
- ・ 昭和時代 (昭和30年代頃) 竣工



江戸時代の堤防の痕跡



江戸・明治・昭和各時代の堤防

まとめ

- 絵 図：河川氾濫による災害時の情報が得られる。
打杭・牛類・杵類等の水制工法が用いられていた。
復旧対策として堀替・水除土手の工事が行われていた。
絵図の注記から国・藩・村による普請の種類が確認できる。
絵図は当時の記録写真に匹敵し、情報満載の資料といえる。
- 水 帳：当該村の氾濫規模や罹災地域の特定につながる。
水帳の永引年と古記録の氾濫年月に差異が認められる。
- 古記録：氾濫時の臨場感あふれる記述に触れられる。
御年譜の罹災記述と、地方文書による罹災記述に相違が認められる。